研究ノート

内モンゴル自治区フレー旗における民族教育の現状
― 砂漠の村マルトール・ガチャーの学校教育を事例に ―

The Present Situation of Ethnic Education in Hüree Banner of Inner Mongolian Autonomous Region:
A Case Study of School Education in Desert Village Maltuur

アルタンホァール
（昭和女子大学大学院生活機構研究科博士後期課程）
ALTANHUAR
（Graduate School of Life Sciences, Showa Women's University）

キーワード：少数民族教育、学校教育、学校選択、モンゴル語
Keywords: Ethnic education, School education, School choice, Mongolian

目　次

0. はじめに
1. マルトール・ガチャーの概況
2. マルトール・ガチャーにおける現地調査
　2-1. 調査の意義と方法
　2-2. マルトール・ガチャーにおけるモンゴル語の現状
　　（1）調査の対象と内容
　　（2）調査の結果
　　（3）調査の分析
3. マルトール・ガチャーにおける民族学校教育の現状
　3-1. マルトール・ガチャーにおける学校教育
　3-2. マルトール・ガチャーのモンゴル人たちの学校選択とその変化
4. モンゴル語と民族教育に対する意識
5. 考察と今後の課題

0. はじめに

内モンゴル自治区通遼市（旧ジリム盟）におけるフレー旗では漢人植民の入植状況の違いにより、モンゴル語の使用状況が大きく異なっている。特に、漢人植民が多い西南部と西部の地域において、モンゴル人たちの言語が「漢語化」している。その上、内モンゴル地域で学校統廃合が進められたことにより、2001年、「フレー旗農村地域と牧区地域完全小学校布局調整方案」が制定され、その方案により、フレー旗のガチャー（村）における小学校が次々と廃校になった[1]。2002年、マルトール小学校が廃校になったため、ガチャーのモンゴル人たちが子どもを「どこの学校に行かせるか」、「何語で学校教育を受けさせるか」という学校選択の課題を抱えるようになった。このような状況により、マルトール・ガチャーの子どもたちの多くが漢語で学校教育を受けるようになった。なぜ彼らは漢語で学校教育を受けなければならなかったのか？　その社会的状況はどうであったのか？　その原因を探るため、2016年8月と2017年4月、筆者はマルトール・ガチャーで現地調査を行った。

本稿は、マルトール・ガチャーにおけるモンゴル人たちの学校教育の選択とその変化、彼らのモンゴル語とモンゴル語教育に対する意識、ガチャーにおけるモンゴル語教育の社会的状況を把握し、分析するものである。それにより、マルトール・ガチャーにおける言語生活と民族学校教育の実態を明らかにする[2]。

1. マルトール・ガチャーの概況

マルトール・ガチャーはフレー旗六家子鎮の3つの混合ガチャー（村）の1つである[3]。2016年8月現在、このガチャーに2つのグループがあり、第1グループがシャラタラー村で、漢人居住地域である。第2グループはマルトール・ガチャーで、モンゴル人居住地域である。行政単位では1つのガチャー（村）になっているが、実際には漢人村とモンゴル人ガチャーが約3キロ離れた2つのガチャー（村）である。

マルトール・ガチャーは、地理的にフレー旗の中心より西北約60キロ離れており、西部はナイマン旗、北部はフレー旗のマンハン・ソムと隣接した六家子鎮北部の辺鄙な砂漠地帯に位置している。

マルトール・ガチャーの面積は約49,000ムー（畝）（1畝＝約666.67㎡）で、牧草地面積が約4,960ムー、森林面積が約3,700ムー、耕地面積が約3,000ムーを占める。このガチャーは砂漠地域に位置しているため、牧畜業と農業のどちらも困難で、住民の生活収入は理想的とは言いがたい。干ばつの年や市場状況によって、農業収入が比較的少ないため、生活収入は保証されていない。牧畜業として牛を飼っている家庭が多く、2016年8月現在、ガチャー全体で約500頭の牛がいる。羊を飼って

1　2001年5月に決定された『国務院基礎教育改革と発展に関する決定』により、2001年末、『フレー旗農村牧区完全小学校布局調整方案』が制定された。それにより、「フレー旗の実際に基づき、教育資源を充分利用する」方案に基づき、農村牧区地域の小中学校を次々と廃校にし、ソム、鎮に集中した（宝音孟和（2015）90-100頁）。

2　「民族教育」とは「それぞれの民族が自らの言語や文化を維持・伝承するため行う教育」（岡本雅享（2008）101頁）を言う。本稿で言う「民族教育」はモンゴル民族の言語や文化を維持・伝承するための教育を指す。そして「民族学校教育」とはモンゴル語で授業を行う学校教育のことを指す。

3　混合ガチャーとは、本稿では漢人とモンゴル人が雑居するガチャー（村）のことを指す。

いるのは3～4家庭しかいない。

地域の砂漠化により住民の生活が困難となったため、フレー旗人民政府が、2003～2012年の間に2回に渡って、100世帯からなる約300人をフレー鎮へ移住させた。そのため、2016年8月現在、マルトール・ガチャーの人口は38世帯からなる約140人であった。

2. マルトール・ガチャーにおける現地調査

2-1. 調査の意義と方法

内モンゴル自治区における民族教育に関する研究には、民族学校教育での第二言語（漢語）教育などの言語政策、そのために惹起されたモンゴル語教育の衰退、モンゴル民族学校に通う学習者の減少状況などを分析した研究が多い。そのような研究として、哈斯額爾敦（2005）、哈申格日勤・小柳正司（2007）、ウルゲン（2009）、崔淑芬（2011）、ムンクバト（2012）、Sodu.B（2013）が挙げられる。

しかし、農村地域と牧畜地域におけるモンゴル人の学校選択を経済的事情、労動力や交通の便利さなどの生活と社会的状況から分析した研究は少ない。

本稿では、内モンゴル自治区フレー旗のマルトール・ガチャーを事例にし、このガチャーのモンゴル人たちのモンゴル語とモンゴル民族教育の現状を把握し、モンゴル民族学校の選択などについて抱えている問題を分析する。これは、内モンゴル自治区、特に、農業地域と牧畜地域でのモンゴル民族教育や民族文化の発展とその継続を考える上で、重要な点であると思われる。

フレー旗における民族教育に関係する先行研究や資料が少ないため、現地住民である被調査者たちの言語事情、特に、モンゴル語の読み書きの能力を考慮し、有効な調査方法を検討した上で現地に赴き、聞き取り調査を重ねて分析することが必要であると考えられる。

2-2. マルトール・ガチャーにおけるモンゴル語の現状

(1) 調査の対象と内容

マルトール・ガチャーの7世帯からなる31人に対して聞き取り調査を行った。世帯の選択は、全38世帯から、子どもを漢族学校に通わせた世帯、現在（2016年）通学している子どもがいる世帯の中から子どもに漢族の学校を選択させた世帯、子どもにモンゴル民族の学校を選択させた世帯、という三つの条件を付けて7世帯を抽出した。この31人に対して、子どもの学校選択はどうであったか、日常生活の中でモンゴル語をどの程度使用しているか、親たちの子どもの学校教育とモンゴル民族教育文化に対する意識と抱えている問題について聞き取り調査を行った。以下、その具体的な内容を記し（表1～表7）、分析する。

被調査者31人のモンゴル語の能力を分かりやすく示すため、モンゴル語を「読む、書く、聞く、話す」に分けて表で示す。レベルの基準は聞き取り調査に基づき、筆者の判断でそれぞれ「よい」（80％程度）＝○、「できる」（50％程度）＝△、「少しできる」（20％程度）＝▲、「ほとんどできない」（20％以下）＝×で表示する。

表の「モ」はモンゴル語を、「漢」は漢語を、「モ・漢」はモンゴル語と漢語両方を表す。「教育を受けた言語」の欄の空欄は学校教育を受けていないことを表す。

(2) 調査の結果

本節で、マルトール・ガチャーにおけるモンゴル語の現状がどうであるかを現地調査によりまとめる。以下に、学校教育を漢語で受けた家庭とモンゴル語で受けた家庭を分けて示す。

a. 漢族の学校を選択した家庭の状況

表1　A世帯　3名のモンゴル語の能力と日常生活で使用する言語の状況

（記号などについては本稿を参考）

	年齢	教育を受けた言語	モンゴル語の能力				日常生活で使用する言語
			読む	書く	聞く	話す	
夫	49	モ	○	○	○	○	モ
妻	46	モ	○	○	○	○	モ
息子	22	漢	×	×	△	△	モ・漢

A世帯は3人家族である。夫婦の間はモンゴルで話すことが多い。夫婦と息子の間は漢語で話すことが多い。息子は漢族の学校に入ってからモンゴル語で話すことは少なくなり、学校をやめてから少しずつモンゴル語で話すようになっている。息子はモンゴル語の読み書きができない。A世帯の夫の話によれば、息子が学校に入るその年からマルトール小学校が廃校になり、息子にガチャーの小学校でモンゴル民族教育を受けさせたいという希望を叶えることができなくなった。その時はただ、交通の便利さを考慮し、幼いころから親元を離れて遠くに行かせるのは子どもに精神的な負担をかけるのではないかと懸念し、三道窪の漢族学校に行かせた。息子は小学校のころ、日常会話などで困ったことはなかったが、勉強の面で少し困難な状況が見られた。そして、中学校に入ってから、息子自身が学校を嫌うようになり、中学校入学後、間もなく学校をやめた。息子に漢語で学校教育を受けさせたことが、A世帯の夫婦にとっては後悔となっているそうだ。

表2　B世帯　4名のモンゴル語の能力と日常生活で使用する言語の状況

（記号などについては本稿を参考）

	年齢	教育を受けた言語	モンゴル語の能力				日常生活で使用する言語
			読む	書く	聞く	話す	
夫	58	モ	○	○	○	○	モ
妻	54	モ	△	△	○	○	モ
次女	25	モ	○	○	○	○	モ
三女	20	漢	×	×	△	△	モ・漢

B世帯の長女と次女はモンゴル民族学校に通い、モンゴル語で教育を受けた。長女は結婚したため、現在は4人家族である。次女は大学を出て旅行会社に勤めている。三女が学校に入る時、近隣にモンゴル民族の学校がなかった。親は娘の学校選択で悩んだが、家庭の中で労働力が不足していた

ため、遠く離れたモンゴル民族学校に行かせることができなかった。そのため、付近の三道窪の漢族学校に行かせた。三女は学校に入って漢語で教育を受けてから、モンゴル語で話すことが少なくなり、漢語を使うことが多くなった。学校でのコミュニケーションや授業で困った様子はなかった。彼女は小学校のころ成績が優秀で学校が好きだった。しかし、中学校に入ってからだんだん学校を嫌うようになり、中学校2年生の時に学校をやめた。それは、中学校に入ってから授業の内容が難しくなり、ついて行くのができなくなったこと、クラスの中で彼女一人がモンゴル民族だったため、漢人の同級生たちにいじめられたことが原因だそうである。彼女はモンゴル語の読み書きができない。学校をやめてから少しずつモンゴル語で話すようになっているが、流暢ではない。漢族の学校を選択したことは彼女と両親にとって後悔として残った。

表3　C世帯　4名のモンゴル語の能力と日常生活で使用する言語の状況

（記号などについては本稿を参考）

	年齢	教育を受けた言語	モンゴル語の能力				日常生活で使用する言語
			読む	書く	聞く	話す	
夫	41	モ	○	○	○	○	モ
妻	42	モ	○	△	○	○	モ
娘	16	漢	×	×	△	▲	漢
息子	7	漢	×	×	△	▲	漢

C世帯の家族の中で夫婦の間はモンゴル語で話すことが多いが、子どもと話す時は漢語を使用することが多い。2人の子どもは入学する前に漢語がほとんど話せない状態であったが、漢族の学校に入ってからは、モンゴル語で話すことが少なくなった。2人ともモンゴル語の読み書きができない。少し聞き取れるがモンゴル語で話そうとしない。夫婦が2人の子どもに合わせて漢語で話すことが多い。子どもたちが学校に入る時、近隣にモンゴル族の学校がなかったため、経済的事情や生活面での便利さを考え、2人の子どもを漢族の学校に行かせることにした。現在、2人の子どもは小学校と中学校に通っているため、将来どうなるかについては、何も言えないところである。出世さえすれば、漢族学校に行かせたことに特に後悔はない。モンゴル民族学校がなかったから仕方がなかったそうである。

表4　D世帯　5名のモンゴル語の能力と日常生活で使用する言語の状況

（記号などについては本稿を参考）

	年齢	教育を受けた言語	モンゴル語の能力				日常生活で使用する言語
			読む	書く	聞く	話す	
父親	60代	モ	△	△	○	○	モ
夫	40代	モ	○	○	○	○	モ
妻	40代	モ	○	○	○	○	モ
娘	19	漢	×	×	△	▲	漢
息子	14	漢	×	×	△	▲	漢

家庭内で夫婦と父親の間や日常生活の中ではモンゴル語を使用することが多い。2人の子どもと話す時は漢語で話すことがだんだん多くなっている。子どもたちは積極的にモンゴル語で話そうとしない。2人の子どもは学校に入る前はモンゴル語しか話せなかったが、学校に入ってからは家庭内でもあまりモンゴル語を話さなくなっている。もちろん、モンゴル語の読み書きはできない。夫の話によれば、2人の子どもを漢族の学校に行かせた後、子どもの学校の授業や学校内でのコミュニケーションに不安があった。そのため、漢語を速く覚えさせ、勉強も頑張って欲しかったので、家庭内でも積極的に漢語で話すようにしていたため、子どもたちが日常生活の中で漢語に困っている様子はなかった。しかし、学校の授業について行けなくなることが多くなった。そのため、娘は学校が嫌いになり、小学校を卒業してから学校をやめた。学校の授業について行けなかったことが一番大きな原因であったと考えられるそうだ。

b. モンゴル民族の学校を選択した家庭の状況

表5　E世帯　4名のモンゴル語の能力と日常生活で使用する言語の状況

（記号などについては本稿を参考）

	年齢	教育を受けた言語	モンゴル語の能力				日常生活で使用する言語
			読む	書く	聞く	話す	
夫	38	モ	○	○	○	○	モ
妻	34	モ	○	○	○	○	モ
娘	12	モ	○	○	○	○	モ
息子	9	モ	○	○	○	○	モ

家族4人は日常生活の中でモンゴル語を使用する。夫婦は2人の子どもを50キロ離れたマンハン・ソムのモンゴル民族学校に行かせた。実は、「学前班」[4]の時には9歳の息子を付近の漢族学校に通わせたが、小学校1年生からモンゴル民族の学校に通わせた。なぜなら、このガチャーの漢語で教育を受けた子どもたちの多くが中学校時代から学校の授業について行けなくなり、学校をやめてしまうからである。今まで漢語で教育を受けた子どもの中から大学に進学した人がいないことも不安だったからである。子どもを遠くの学校に行かせることは、経済的な負担や子どもと親が長期間離れて精神的な負担になるが、子どもの未来を考えてモンゴル民族の学校に行かせた。

[4] 「学前班」とは、幼稚園の不足を補うため小学校に附設された幼児クラスのことを指す（岡本雅享（2008）101頁）。フレー旗では1984年9月に「学前班」が設立された（宝音孟和（2015）35頁）。

表6　F世帯　5名のモンゴル語の能力と日常生活で使用する言語の状況

（記号などについては本稿を参考）

	年齢	教育を受けた言語	モンゴル語の能力				日常生活で使用する言語
			読む	書く	聞く	話す	
祖父	69	モ	○	△	○	○	モ
祖母	67		×	×	○	○	モ
夫	30	モ	○	○	○	○	モ
妻	31	モ	○	○	○	○	モ
息子	7	モ	×	×	○	○	モ

「教育を受けた言語」の空欄は学校教育を受けていないことを表す

家族5人は日常生活の中でモンゴル語を使用する。家族の意見で息子を50キロ離れたマンハン・ソムのモンゴル族学校に行かせ、モンゴル語で学校教育を受けさせていた。2016年8月現在、「学前班」にいたため、学校の寄宿舎には入れない。そのため、学校にいる時は祖母が孫といっしょに学校の近くに部屋を借りて生活している。夫の話によれば、家賃と送迎の交通費だけを考えても経済的に大変厳しい状態であるが、子どもの未来を考えることが何よりも大事なので、モンゴル語で学校教育を受けさせたようである。実は、三道窪の漢族学校に行かせれば、子どもが家から通学できるため、経済的な負担は少ない。しかし、祖父母から孫に必ずモンゴル語で教育を受けさせるようにとの要望があり、またガチャーの漢族の学校に通っていた子どもたちが学校を中退する例が多かったので、息子をモンゴル民族学校に行かせたようである。

表7　G世帯　6名のモンゴル語の能力と日常生活で使用する言語の状況

（記号などについては本稿を参考）

	年齢	教育を受けた言語	モンゴル語の能力				日常生活で使用する言語
			読む	書く	聞く	話す	
祖父	74		△	▲	○	○	モ
祖母	70		×	×	○	○	モ
夫	33	モ	○	○	○	○	モ
妻	31	モ	○	○	○	○	モ
長女	10	モ	○	○	○	○	モ
次女	6	モ	×	×	○	○	モ

「教育を受けた言語」の空欄は学校教育を受けていないことを表す

G世帯の家族6人は日常生活の中でモンゴル語を使用する。2人の娘にモンゴル語で教育を受けさせるのは家族全員の希望である。

2012年、砂漠化によるフレー旗人民政府の指示で、祖父母はフレー鎮に移動して生活をしていた。2016年8月現在、祖父母は、次女がモンゴル民族学校の小学校1年生になって学校の寄宿舎に入るまで面倒を見るため、地元に戻って来ていた。

祖父は、私たちは学校に行くことができなかったので、その分、孫娘たちには頑張って欲しい。「孫

娘たちにモンゴル民族の言語と伝統的な文化を勉強させ、覚えさせる」ことは、私たちの「責任であり、希望でもある」と話す。もう一つは、このガチャーの子どもに漢語で教育を受けさせて失敗した例が多いため、自分の子どもにはどうしてもそのような失敗をさせたくないというのが、G世帯の家族みんなの希望だそうだ。

マルトール・ガチャーのモンゴル人たちは、漢人たちと隣り合って生活していないため、日常生活の中で使用する言語はモンゴル語であると考えられていた。しかし、現地調査により現状を把握した結果、そうではなかった。マルトール・ガチャーの38世帯の中で、家庭内や日常生活の中で使用する言語が漢化している現状が見られた。その中にはモンゴル語の読み書きができず、話すのも困難な若者や子どもたちがいる。子どもたちに従い、親たちも漢語で交流する状況も見られた。なぜこのような現状になっているのかについては、次に述べる。

(3) 現地調査の分析

これまでの表1～表7に基づき、被調査者たちのモンゴル語の能力と日常生活で使用する言語の現状を、その社会的言語環境の状況と学校教育の現状から分析する。

被調査者31人全員の母語はモンゴル語である。その中で25歳以上の20人はすべてモンゴル語が話せる。その中には漢語で教育を受けた人はいない。

表1～表4で4世帯16人のモンゴル語の能力と日常生活の中で使用する言語の状況を見た。B世帯の次女を除き、6人の子どもが漢語で教育を受けた。その6人の中で3人（50％）が中学に入学前か入学後に学校をやめた。6人とも小学校に入学してからモンゴル語で話すことが少なくなり、いまだにモンゴル語で流暢に話せる人がいない。もちろん、彼らは、モンゴル語の読み書きができない。家庭内で親が子どもに従い、漢語を使用することが多くなっている例も多い。

表5～表7を見ると、3世帯15人が日常生活の中でモンゴル語を使用している。3世帯は5人の子どもたちをモンゴル民族の学校に行かせている。遠く離れたモンゴル民族学校に行かせると経済的事情などがいろいろと厳しい状態になるが、子どもを漢族の学校に行かせて失敗させたくないため、モンゴル民族学校を選択したというのが、E世帯～G世帯の共通点である。

25歳以下の12人中6人が漢語で教育を受け、その他6人がモンゴル語で学校教育を受けている。12人のモンゴル語の能力を表8にまとめ、分析する。

表8　25歳以下の被調査者たちのモンゴル語の能力

（記号などについては本稿を参考）

世帯	A	B	B	C	C	D	D	E	E	F	G	G
年齢	22	25	20	16	7	19	14	12	9	7	10	6
教育を受けた言語	漢	モ	漢	漢	漢	漢	漢	モ	モ	モ	モ	モ
モンゴル語（読む）	×	○	×	×	×	×	×	○	○	×	○	×
モンゴル語（書く）	×	○	×	×	×	×	×	○	○	×	○	×
モンゴル語（聞く）	△	○	△	△	△	△	△	○	○	○	○	○
モンゴル語（話す）	△	○	△	▲	▲	▲	▲	○	○	○	○	○

表8から分かるのは、12人の中でモンゴル語の読み書きができるのは4人（40%）で、その他6人（60%）ができない（「学前班」の2人を除く）。漢語で教育を受けた6人全員が、モンゴル語の話し言葉を理解し聞き取れるが流暢に話せない。モンゴル語で話せるのは2人で、漢語で教育を受けた全員の33%を占めている。2人は学校をやめてからモンゴル語で話せる機会が多くなり、モンゴル語の能力も少しずつ上達しているそうである。67%を占める4人が、少しだけモンゴル語で話せる。4人の親たちも子どもに従い、日常生活の中で漢語を使用することが多くなっている。

以上の分析によると、マルトール・ガチャーのモンゴル人たちの日常生活の中で使用するモンゴル語の漢語化は、子どもたちの学校選択によるものであることが分かる。子どもたちが入学する前は、日常生活の中でモンゴル語を使用していたが、漢族の学校に入ると、家庭内でもモンゴル語を使用する機会が少なくなり、モンゴル語を聞き取り理解するのもだんだん困難になる。そのような状況によって、親たちも、子どもとの交流のために漢語を使用してしまうのである。

マルトール・ガチャーのモンゴル人たちは、なぜ子どもに漢族の学校を選択させているのか？次にこのガチャーの民族学校教育について述べる。

3. マルトール・ガチャーにおける民族学校教育の現状

3-1. マルトール・ガチャーにおける学校教育

マルトール・ガチャーにおける民族教育の状況を知るためには、筆者自身がまずガチャーにおける学校教育を知ることが必要であった。このガチャーの学校について資料がなかったため、ガチャーの共産党委員会書記をつとめている金山氏に話しを聞くことにした。彼の話をまとめると以下の通りである。

1990年代までマルトール・ガチャーで学校教育を受けられる人は少なかった。それは、このガチャーが辺鄙な砂漠地域に位置し、乾燥気候が続き、住民の収入は少なく、生活は困窮し、子どもを学校に行かせる余裕のある家庭があまりなかったからである。1990年代初めの義務教育の実施から2001年まで、マルトール・ガチャーのモンゴル人の子どもたちはガチャーの小学校に入り、モンゴル語で教育を受けるのが当たり前のことだったので、親たちにも学校選択の悩みがなかった[5]。

2002年にマルトール小学校が廃校になったため、マルトール・ガチャーのモンゴル人の子どもたちの学業は重大な困難に陥った。隣接地域の一番近い学校と言えば、約7キロ離れた三道窪（サンドォワー）学校である。しかし、三道窪学校は漢族の学校であり、モンゴルクラスが設立されていない。モンゴル人の子どもたちがこの学校を選択すると、完全に漢語で教育を受けることになる。

モンゴル民族学校に入る子どもたちは、フレー旗内の各ソムのモンゴル民族学校か、隣接するナイマン旗など他旗のモンゴル民族学校まで通っていた。ところが、2011年にフレー旗教育局は他旗、他ソムなど外部の学校に入学することを禁止した。そのため、2012年にマルトール・ガチャーの住民たちが話し合い、フレー旗の教育局に要求を出し、ガチャーから50キロ離れたマンハン・ソムの

5　1986年「中華人民共和国義務教育法」（旧法）により、現在の「9年義務教育」が実施された。2006年、「義務教育改正法」が公布された（ウルゲン（2015）115頁）。

フレー旗では、1993年「9年義務教育の実施」の宣布により義務教育が始まった（宝音孟和（2015）177頁）。

モンゴル民族学校に行かせる許可を得た。それ以来、モンゴル民族学校を選択する子どもたちは、マンハン・ソムのモンゴル民族小中学校に通うようになった。

3-2. マルトール・ガチャーのモンゴル人たちの学校選択とその変化

前述したように、マルトール・ガチャーは砂漠地域に位置し、住民の収入も保証できず、さらに交通も不便だった。このような現状で2002年にガチャーの小学校が廃校になったため、住民は「学校選択」という難題を抱えるようになった。

子どもたちがモンゴル民族の学校を選択しようとすれば、マルトール・ガチャーから約50キロ以上離れたマンハン・ソムのモンゴル民族学校に通うしかない。5～6歳になった子どもたちは「学前班」に入れるが、小学校1年生になるまでは、学校の寄宿舎に入ることができない。そのため、学校の付近に部屋を借り、家族の誰かが子どもに付き添い、いっしょに暮らさなければならない。このようにして、「学前班」に早く入った子どもが、親元を離れて2～3年暮らすこともある。その上、毎週末は帰宅するため経済的負担が大きく、親子が長期間離れて暮らすことも大きな精神的負担となっている。

F世帯の夫の話によれば、「学前班」に入学した子どもが1年間に使うお金は次のようである。

> 1年間の家庭の収入は約30,000～50,000元（510,000～850,000円）（1円＝17元）である。子どもが「学前班」に入学すると1年間に約15,900元（270,300円）かかる。内訳は、家賃5,000元＝85,000円（1学期2,500元、1年間5,000元）、毎週末送迎する交通費が1年間3,200元＝54,400円（1ヶ月×8回×50元＝400元（最低限）、1学期1,600元）、2人（子どもと付き添いの人）の食費3,200元＝54,400円（1日20元、1年間160日×20元＝3,200元）（これには子どものお菓子代も含み、最低限で計算している）、光熱費は1年間約2,000元＝34,000円、雑費は2,500元＝42,500円程度である。

これに対して、マルトール・ガチャーのモンゴル人たちが、7キロ離れた三道窪学校に子どもを行かせれば、経済的に楽であり、また労働力も節約できる。さらに、子どもを寄宿舎に入れずに朝晩バイクで送迎するため、親子が長く離れて暮らすこともなく、精神的な負担がかからない。

以上の理由により、マルトール・ガチャーのモンゴル人たちが子どもを漢族の学校に行かせ、漢語で教育を受けさせることによって、当面する困難を回避していたことが窺える。

しかし、子どもたちに漢語で教育を受けさせたA世帯～D世帯の現状から分かるのは、漢語で学校教育を受けた6人中の3人が、中学校も卒業できずに学校を嫌うようになり、学校をやめてしまったことである。親たち（C世帯を除く）も子どもに漢語で教育を受けさせたことを後悔している。

2010年以来このガチャーから5人が大学に進学している。その5人ともモンゴル語で学校教育を受けている。

2016年8月現在、マルトール・ガチャーの通学生徒は23人いる。図1に示すように、この中でモンゴル民族小中学校に通っている生徒は、合わせて19人で、通学生徒全員の82.6％を占めている。19人の中で14人（約74％）がマンハン・ソムの小中学校に通っている。漢族の学校に通っているのは4人で、通学生徒全員の17.4％を占める。

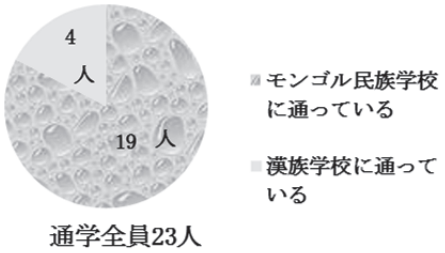

図1　2016年マルトール・ガチャーの子どもたちの通学状況

上記の現状によれば、モンゴル民族学校に通っている生徒数は漢族の学校に通っている生徒数の約5倍となっている。

以上の結果を2011年の状況と比較した図2を見ると、2011年に漢族の学校に通っていた生徒数が全体の81%を占め、モンゴル民族学校に通う生徒数の4.3倍だったのに対し、2016年にはその数が逆転し、モンゴル民族の学校に通う生徒数の方が圧倒的に多くなっていることが明らかである。

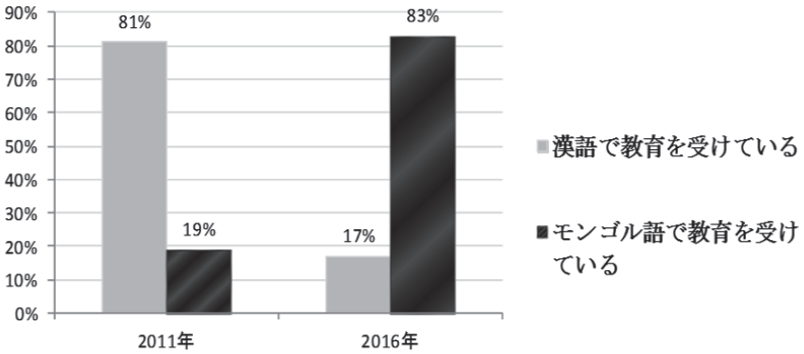

図2　2011年と2016年のマルトール・ガチャーの通学校生の割合

以上の結果から、マルトール小学校が2002年に廃校になって以来、ガチャーのモンゴル人たちは、経済的事情などの生活条件により、比較的距離の近い漢族の学校を選択し、当面する困難を回避していたことが分かる。しかし、子どもたちが漢族の学校に入り、漢語を学びながら漢語で学校教育を受ける過程で、学校の授業について行くのが困難となる場合が多いため、学校を嫌うようになり、学校を次々とやめる例が続出した。そして、このような失敗例が住民たちの経験となり、2016年現在、モンゴル語で教育を受けている子どもの数が8割を占める結果となった。

このようなマルトール・ガチャーのモンゴル人たちの学校選択の変遷に、近年、このガチャーの住民たちの生活レベルが上昇し、ガチャーの道路が舗装されて便利になった状況も好影響を与えていることを付言しておきたい。

4. モンゴル語と民族教育に対する意識

以上、マルトール・ガチャーにおける民族教育の現状について述べた。本節では、マルトール・ガチャーの被調査者23人（生徒8人を除く）に対してモンゴル語とモンゴル民族教育に対する意識について行った聞き取り調査を以下の通りまとめ分析する。

(1) モンゴル語と民族教育に対する意識

①モンゴル人の子どもたちが漢語で教育を受けるのは有利だと思いますか？

C世帯の夫婦以外の21人が「そう思わない」と答えた。この中で3世帯（A、B、Dの3世帯）の親たちが、近隣にモンゴル民族学校がなかったため、子どもに漢語で教育を受けさせていた。

2016年現在、3世帯の3人の子どもが学校をやめていた。子どもたちが学校をやめたことはガチャーの全員が共有する経験となり、それは、どうしても漢語で学校教育を受けさせたくないというE世帯～G世帯の理由の共通点となっている。

B世帯の三女は、「私は勉強が大好きでした。子どものころから大学を出て学校の先生になる夢がありましたが、それは実現できませんでした。もしも姉のようにモンゴル民族学校に行けたら、私も大学に進学できました」とモンゴル語交じりの漢語で話した。

E世帯の夫の回答：モンゴル民族学校でも漢語を学べるし、現在はネットの時代で、ネットや携帯電話でも漢語を学ぶことができる[6]。漢語で学校教育を受けるとモンゴル語の勉強ができないため、逆に競争が厳しくなる。モンゴル語で教育を受けると両言語ができて有利であると考え、子ども2人を遠くのモンゴル民族学校に行かせた。

C世帯の夫婦の回答：子ども2人に漢語で教育を受けさせていることが有利かどうかは、今のところ何とも言えない。子どもが入学する時、労働力や交通の便利さなどを考え、また家庭的ないろいろな事情もあり、近隣の漢族の学校に行かせた。

以上の回答から見ると、被調査者の多く（21人）は、モンゴル語で学校教育を受けるのは有利であると考えている。ただ、近隣にモンゴル民族学校がなかったため、またいろいろな家庭的事情により、仕方なく漢族の学校に行かせていることが判明した。

②子どもにモンゴル語とモンゴル文化を勉強させたいと思いますか？

被調査者全員が、子どもにモンゴル語とモンゴル民族文化を勉強させたいと答えた。A、Bの2世帯の親は、子どもが学校をやめた後、子どもはモンゴル語を流暢に話せるため、家庭内ではできる

6　少数民族（北方）の漢語教育は、50年代初めに中学校1年から学習をはじめ、50年代後半～60年代初頭に小学校高学年からとなり、80年代以降現在のところ小学校2～3年から始まるのが一般的である（岡本雅享（2008）115頁）。

フレー旗では、1959年3月から、民族小学校3年から漢語を教えるようになり、1964年7月、教育庁の通知に従い、小学進学試験に漢語が加えられた。1972年から小学校2～3年から授業数は週に5回となった。2005年から「学前班」で漢語会話の授業を開始し、2007年から民族小学校のすべての年次で漢語の授業を開設した（宝音孟和（2015）15, 33, 117頁）。

だけモンゴル語で話すようにしていると言う。

C世帯の夫婦は、子ども2人にモンゴル語とモンゴル文化を勉強させたいが、子どもたちが漢語で学校教育を受けているため、子どもに従って漢語で話すことも少なくない。これからは気をつけて、子どもが今まで覚えたモンゴル語を忘れさせないため、家庭内の交流でもモンゴル語を使用するよう心がけたいと話す。

F世帯の祖父母は、子どもたちが自民族の文化と習慣を尊敬し、覚えてゆくことに気を使っている。孫はまだ7歳だが、モンゴル民族文化（家畜や遊牧生活など）についてよく話して聞かせている。大人になってもモンゴル民族文化を勉強し、覚えてゆけることを願って、遠くのモンゴル民族の学校に行かせた。祖父は「民族の言語と文化を覚えて、勉強していくことは大切だと思う。社会の発展につれて、他民族の言葉を喋り、携帯電話ばかり弄っている子どもや若者たちが増え、モンゴル民族の言葉や文化が忘れられていることに心が痛む」と話す。

E世帯の回答：息子を1年間漢族の「学前班」に行かせていたが、小学校1年生になる時に、マンハン・ソムのモンゴル民族小学校に行かせた。

G世帯の祖父の回答：孫娘たちにモンゴル語とモンゴル文化を勉強させるのは私の責任である。次女の孫娘はフレー鎮の漢族幼稚園に1年通ったため、よく漢語で話そうとする。話す度に家族のみんなが注意し、モンゴル語で話すように教えている。

以上の回答から見ると、被調査者21人が子どもにモンゴル語とモンゴル文化を勉強させたいと考えていることが分かる。

(2) モンゴル民族学校に対する要望

民族学校についてどのような要望があるかを被調査者全員に聞いてみた。全員の回答はガチャーにモンゴル民族学校を再建することである。

2002年ガチャーの小学校が廃校にされて以来、子どもの学校選択は住民たちにとって一番大きな課題となった。

マルトール・ガチャーの住民の生活が向上し、道路が舗装されて交通が便利になったとしても、50キロ以上離れているモンゴル民族学校に子どもを行かせるのは容易ではない。そのため、住民たちは、ガチャーに小学校を再建するよう要望してきた。しかし、その要望が実現する気配は今のところない。

住民の話によれば、マルトール・ガチャーには村（漢人居住地区）とガチャー（モンゴル人居住地区）の2つのグループがあり、2015年まで村の漢人がガチャーの共産党委員会書記をつとめてきた。そのため、モンゴル人の子どもたちの学校教育をそれほど考えてくれなかったこともあったようである。

2015年、モンゴル人の金山氏がマルトール・ガチャーの共産党委員会書記に就任してから、ガチャーの住民たちが直面している難題である、モンゴル人の子どもをモンゴル民族学校に通わせるという問題を解決するため、ガチャーのモンゴル人たちと力を合わせて努力してきた。金山氏は、自分の息子を漢族の学校に行かせて失敗した教訓を糧にして、ガチャーのモンゴル人の子どもたちから一人でも多くの子どもを民族学校に行かせたいと、ガチャーに「学前班」を設立するため努力

している。その希望を実現するため、フレー旗の教育局など行政機関に要求を出しているが、いまだに回答をもらっていないようである。このことから、ガチャーのモンゴル人たちが、モンゴル語とモンゴル民族教育に強い関心と愛着をもっていることが観察される。

5. 考察と今後の課題

2016年8月と2017年4月にフレー旗マルトール・ガチャーで行った現地調査により、このガチャーのモンゴル人たちのモンゴル語の漢語化と学校選択の現状を明らかにし、ガチャーのモンゴル人たちのモンゴル語と民族文化に対する意識について、以下のように把握することができた。

①このガチャーから漢族の学校に入った子どもたちが、漢語を学びながら漢語で学校教育を受けるようになり、親たちも、子どもを学校の授業について行かせるため、子どもに従って漢語を使うようになったため、日常生活で漢語を使用する人が増えたと考えられる。

②マルトール・ガチャーのモンゴル人たちが子どもを漢族の学校に行かせたのは、漢語で学校教育を受けさせたいからではなく、経済的な事情や家庭的な状況により、比較的距離の近い漢族の学校を選択していたことを明らかにした。漢族の学校に行かせた子どもたちが学校をやめた事例、モンゴル民族学校に行かせた子どもたちが大学に進学した事例が、ガチャーの住民にとってよい経験になったこと、またガチャーの住民の生活が向上し、道路が舗装され便利になったことにより、現在8割の子どもがモンゴル族の学校に通っている現状が判明した。

③被調査者の多く（21人）は、モンゴル語で学校教育を受けた方が有利であると考えている。多くの親たちが家庭内でモンゴル語を使用し、子どもに民族文化を教え、覚えさせるための工夫をしていることが判明した。また、住民たちの小学校を再建する希望と努力から、ガチャーのモンゴル人たちのモンゴル語と民族文化に対する強い関心と愛着が観察された。

今後の研究課題としては、フレー旗の全地域における民族教育を考察する必要がある。それにより、モンゴル民族小中学校での民族教育の現状、特に、民族教育での二言語教育と三言語教育の現状を把握し、それらが民族教育に与えている影響を分析する。そして、フレー旗におけるモンゴル民族教育の現状とモンゴル民族の学校選択状況がどのように変化しているのかを明らかにしたい。

参考文献

〔日本語文献〕

アラタン・バートル（2009）「現代中国の少数民族地域における家族の教育戦略―モンゴル族の地域・階層間比較を中心に―」『地域社会学会年報』、第21集、101～113頁。

アルタンホァール（2016）「内モンゴル自治区東部フレー旗におけるモンゴル語の現状―言語生活の社会的背

景―」『生活機構研究科紀要』（昭和女子大学大学院）、第25号、99～112頁。
アルタンホァール（2017）「地域の「危機言語」としてのモンゴル語―内モンゴル自治区フレー旗樹林子村におけるモンゴル語の使用状況―」『生活機構研究科紀要』（昭和女子大学大学院）、第26号、3～41頁。
尹貞姫（2005）「中国における「国民教育」と「少数民族教育」の相克―中国朝鮮族学校における教育課程に着目して―」『国際開発研究フォーラム』30、183～200頁。
ウルゲン（2009）「中国内モンゴル自治区における民族教育―生徒たちの寄宿生活」『佛教大学教育学部学会紀要』（佛教大学教育学部）、第8号、151～159頁。
ウルゲン（2015）『中国におけるモンゴル民族の学校教育』、佛教大学研究叢書、ミネルヴァ書房。
岡本雅享（2008）『中国の少数民族教育と言語政策』（増補改訂版）、社会評論社。
金龍哲（1998）『中国少数民族教育政策文献集』、大学教育出版。
崔淑芬（2011）「内モンゴル自治区の教育現状の一考察」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』、第6号、 155～166頁。
ソロンガ（2006）「中国内モンゴル自治区における民族教育の現状―都市部のモンゴル家族の生活実態を中心に」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』、第7巻、205～234頁。
哈斯額爾敦（2005）「中国少数民族地域の民族教育政策と民族教育の問題―内モンゴル自治区の民族教育を中心に―」『多元文化』、第5号、名古屋大学、265～280頁。
ハスゲレル（2005）「中国におけるモンゴル民族教育の構造と課題―教科書分析を中心に―」『国際教育』、第11号、43～62頁。
ハスゲレル（2006）「中国における少数民族教育の現状」『教育科学研究』、第21号、11～18頁。
哈申格日勤・小柳正司（2007）「中国内モンゴル自治区における民族教育の現状」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』、第17号、101～107頁。
包聯群（2008）「中国黒龍江省ドルブットモンゴル族の言語教育実態」『東北アジア研究』（東北大学東北アジア研究センター編）、第12号、57～78頁。
ムンクバトN.B（2011）「内モンゴル自治区における民族教育について―西ウジムチン旗の民族学校の統廃合からみる」『千葉大学ユーラジア言語文化論集』、第13号、67～75頁。
ムンクバト（2012a）「内モンゴル自治区における民族学校の言語教育について―モンゴル族学校、漢族学校、日本の小学校と在日朝鮮人学校のカリキュラム比較からの一考察―」『ユーラジアの多言語社会と言語政策』（千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書）、第239集、5～20頁。
ムンクバト（2012b）「内モンゴル自治区における牧畜地域の民族教育の現状―民族学生の学校選択に関する一考察―」『千葉大学ユーラジア言語文化論集』、第14号、105～116頁。

〔モンゴル語文献〕

Süke.B（2010）*Andai−yin nutuγ küriy−e qosiγun−u teüke soyul−un tobčiy−a*, Öbür mongγul−un keblel−ün bülüglel, Öbür mongγul−un soyul−un keblel−ün qoriy−a.
Sodu.B（2013）*Küriy−e mongγul kele aman yariy−a sudulul*, Öbür mongγul−un keblel−ün bülüglel, Öbür mongγul−un soyul−un keblel−ün qoriy−a.
Yuan čao（1985）“Mongγul kelen−ü küriy−e qosiγun−u yariyan−u abiy−a kiged tegün−i dürimǰigülkü tuqai”, *Öbür*

mongγul−un ündüsüten−ü baγsi−yin degedü surγaγuli−yin erdem sinǰilegen−ü sedgül, Neyigem−ün sinǰilekü uqaγan−u mongγul keblel, 2 duγar quγučaγ-a, 246-258 duγar niγur.

Öbür mongγul−un öbertegen ǰasaqu orun−u mongγul üge kele bičig−ün aǰil−un dürim 2004, Öbür mongγul−un öbertegen ǰasaqu orun−u arad−un tölögelegčid−ün yeke qural−un bayingγa−yin qoriyan−u qauli dürim−ün aǰil−un ǰöblel.

〔中国語文献〕

巴・苏和（2013）『傳奇的库伦文化』，内蒙古文化出版社。

包福舜（2005）『库伦旗志』，内蒙古文化出版社。

中国人民政治协商会议库伦旗委员会文史资料编委会（2015）『库伦旗文史资料』。

曹道巴特尔（2013）「全球化与中国蒙古语」『蒙古语族语言与地域文化研究论文堤要集』，内蒙古民族大学出版社，319-336页。

宝音孟和（2015）『库伦旗各阶段民族教育发展状况』。

库伦旗教育志编写办公室（2015）『库伦教育志1987～2014』。

SUMMARY

Until 2002, Maltuur village children had learned in elementary school in the village. Not worrying about school choices for children.

However, in 2002, Maltuur elementary school was closed. Mongolian people of this village are “Let the children go to which school to study” “The children accept education into in that language” Encounter the above two choice school problem. Due to this situation, not a few children go to education in Chinese. Why do children have to accept Chinese education? What was the social situation at that time? In order to understand the situation in August 2016 and April 2017, I personally went to the local survey.

This paper is to grasp the situation of the ethnic education of the Mongolian people in the Village society. Also, analyzing the awareness of school choice, Mongolian and ethnic education. From the above analysis, we need to prove the real state of education in the Maltuur village of language life and national schools.